

『みこころにかなった結婚・1』

'21/01/24

聖書箇所: 旧約聖書から随所

先週の礼拝で、私たちは、ヘロデ王が、神様のみこころには沿わない…、「間違った結婚」というものをしてしまったために、そのことをバプテスマのヨハネから指摘されて、ヘロデが、そのヨハネを投獄し…、とうとう、その首をはねてしまったというエピソードを学びました。でも、皆さん、思いませんか？「神様のみこころにかなった結婚」とは、どのようなものなのでしょう？天の神様は、私たちが、どのような結婚をすることを望んでおられるのでしょうか？今日は、そういったことを、皆さんと一緒に学んでいきたいと思ひます。

命題: 主のみこころにかなった結婚とは、どのようなものなのでしょうか？

正直言って、こういった点に関して、私たちの教会も、あまり良い模範を残してきたとは言ひ得ません。でも、だからこそ！私たちは、「あの人はどうか？この人はどうだったか？」ということではなくて、神様のみこころが、どういった点にあるのか？果たして、聖書のみことばは、どう教えてくれているのか？ということ、今日は集中して学んでいきたいと思ひます。…そうすることによって、願わくは、今日このメッセージを聴いてくださった皆さんが、神様のみこころに益々沿っていくことができ、それぞれ、素晴らしいクリスチャンホームを築いていくことを願うものです。

I・神が、“ふさわしい 助け手” を与えてくださる！（創世記 2:18-24）

どうぞ、まずは、聖書の1番初め、創世記のみことばを見て、神様が、どのように、この結婚というものを導いてくださったのか？ということをご一緒に確認していきたく思ひます。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、創世記 2:18-24 をご覧ください。そこでは、1番最初の結婚というものが、“神様によって”、“ふさわしい” “助け手” を与えられたものである！ということが記されてあります。そこでは、こう教えられてあります。

- 18 神である【主】は仰せられた。「人が、ひとりているのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造らう。」
- 19 神である【主】は土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造り、それにどんな名を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来られた。人が生き物につける名はみな、それがその名となった。
- 20 人はすべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけた。しかし人には、ふさわしい助け手が見つからなかった。
- 21 神である【主】は深い眠りをその人に下されたので、彼は眠った。そして、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。
- 22 神である【主】は、人から取ったあばら骨をひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。
- 23 人は言った。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」
- 24 それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。

●神が、お互いの存在を 備えて くださった！

多分、皆さんは、ここのみことばに至る経緯をよーくご存じだろうと思ひます。…創世記 1 章に記されてある通り、天の神様は、わずか6日間で、この宇宙を含む…、すべてのものを御造りになられました。今読んだ部分は、神様がなされた創造の御業の6日目に起こった出来事を、創世記の 1 章とは少し違った視点で説明してくれたものであります。

ここで、天の神様は、最初に造られた人、つまり、アダムが1人で居るのは『良くない…』とおっしゃられて、そうして、その次に何が起こりました？⇒どういふわけか、天の神様は、アダムの前に、たくさんの動物たちを連れてきて、そのアダムに、その動物たちの名前を付けさせるわけです。そこで、アダムは、それらすべての動物たちを見て、名前を付けるわけですが…、20 節、そこには、『ふさわしい助け手が見つからなかった…』わけです。

そこで、神様は、アダムを深い眠りにつけて、そうして、そのアダムのあばら骨から、1人の女性、エバを造られたのです。…この時、アダムは思っただけです。たくさんの動物たちを見て…、その姿や特徴を見て、「自分にふさわしい相手は、どこにも居ない」って…。神様は、敢えて、そのようにアダムに思わせてから、エバを造られたのではないのでしょうか？…そうしたこともあって、エバが与えられた時、アダムは大喜びするわけです。それが、今読んだ、23 節のみことばです。『これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。』って…。例えば、皆さんは、自分の奥さんやご主人のことをこんな風に言えますか？「骨からの骨！肉からの肉！」なんて…。まさしく、アダムにとって、エバという存在は、まるで、“自分の分身”のような存在であったのです！

ここで、アダムは、「女」という呼び名を付けるわけですが、これは、ヘブル語（当時の言葉はヘブル語）で、「イッシャー¹」と発音します。それに対して、男（≒人）は、「イーシュ²」と発音します。「イーシュだから、イッシャー！」なんだか、この時のアダムの喜びようが伝わってきません（笑）？この時のアダムは、「女」という呼び名を付けるに当たって、「男」とよく似た表現を作ったのです。…まあ、このように、アダムは、大喜びで？このエバのことを迎え入れたわけですね。

天の神様は、すべてのことを御存じです。私たちに何が必要で、何が不要でないかも御存じです！そうですね！神様は、アダムに、『ふさわしい助け手』が必要だということで、わざわざ、アダムのことを深い眠りに下されて…、そうして、アダムのあばら骨からエバを造られました。…でも、一体どうして、神様は、アダムのあばら骨から、エバを造られたのでしょうか？…だって、アダムは、『土地のちり』から造られたわけじゃない？私はいこう考えています…。恐らく、天の神様は、アダムがエバのことを、まるで、“自分の分身”であるかのように、いとおしんで…、エバのことを思いやって、エバを心から愛するように、そうされたのではないのでしょうか？…ま、このように、神様は、最初の人間であったアダムにエバを与えてくださったのです。そのように、天の神様は、決して、“良くない”ことを、そのまま放っておかれるような御方ではありません。もしも、あなたが結婚することが必要なら、神様は必ず、あなたを結婚へと導いてくださいます。そうでしょ？

●結婚とは、神が 制定 されたものである。

「でも、この記事は、ただ単に、女性が造られたという記事であって、結婚に関する使信や教えでは無いのでは？」と思われの方もありません。しかし、そうではありません。イエス様は、このみことばを引用して、こう教えてくださっています。マタイ 19:3-6、『3 パリサイ人たちがみもとにやって来て、イエスを試みて、こう言った。「何か理由があれば、妻を離別することは律法にかなっているでしょうか。」 4 イエスは答えて言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、 5 『それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。 6 それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。』

⇒ここで、イエス様は、結婚と言うか、離婚に関しても少し教えてくださっています。ここで、イエス様は、「夫婦というものは、2人で一心同体であって、誰であつても、夫婦である2人を引き離すことはできな

1 イッシャー(אִשָּׁה): 女、女性、妻、婦人

2 イーシュ(אִישׁ): 人、男、夫(、誰か)

い！」と教えてくださっています。ここで、イエス様は、創世記 2 章のみことばを引用して、結婚というものを定められた、神様のみこころを教えてください。ここでイエス様は、結婚という話を語って、『人は(その)父と母を離れ…』、そして、結婚した2人が結ばれて、『一体となる』と教えてください。神様から見て、夫婦の結び付きというのは、血の繋がった親子以上のものなのです！…そうでしょう？

現代にあっては、様々な考えや価値観があって、「そもそも、結婚という制度が、私たち人間の必要や考えに即していない！だから、夫婦間でいろんな問題が起こったり、不倫などで苦しんだりするのだ！だから、私たちは結婚という制度に固執しません！」というような若者たちが居たりします。しかし、そもそも、結婚という制度は、私たち人間の必要によって生じたとか、私たち人間が作り上げたものではありません。結婚というものは、天の神様が制定して、私たち人間に与えてくださったものなのです。

確かに、一見すると、結婚という制度のゆえに、そこにいろいろな問題が生じてしまっているように“見える”かも知れません。しかし、それらは皆、私たちの持っている罪が問題なのであって、結婚という制度から来る問題ではありません。…だって、アダムとエバの場合も、最初は上手くいっていたでしょ？しかし、彼らが神様のみこころに逆らって…、彼らが罪を犯してしまった時から、夫婦間だけでなく、ありとあらゆる様々なところに、たくさん問題が生じてしまったのです…。

時々、旧約聖書のアブラハムやダビデ、あるいは、ソロモンのことを例に挙げて、一夫多妻制について質問されることがありますが、それらはそう難しい問題ではありません。今、引用した創世記 2 章やマタイ 19 章のみことばが教えてくれているように、結婚した2人は、それぞれの父と母を離れて、一体とされるのであって、聖書のみことばは、明らかに、「一夫一婦制」を教えています。だから、結婚したカップル間以外で性的関係を持つことは、神様の前に罪なのです。

確かに、聖書のみことばを見てみると、アブラハムだけでなく…、あのダビデやたくさんの人物に複数の妻のような存在が居たことが教えられています。しかし、それらのほとんどすべては、実際にあったことを、単なる“歴史的事実”として、聖書が記録しているだけであって、決して、聖書が一夫多妻制を支持しているわけではありません。特に、旧約の時代にあっては、当時の時代背景やアラブ地方などで、力を持っていた有力者が複数の妻を持つということが当たり前だったようです。しかし、聖書のみことばは、そうした時代背景に書かれていながら、明らかに、「夫婦というものは神聖なものであって、如何なる人物であろうと、それを犯してはならない！」ということを教えてください。

実際、アブラハムだけではなく、例えば、ダビデやソロモンだって、複数の妻を持ったことで、彼らは幸せだったでしょうか？その欲望が満たされて、より幸せになることができたでしょうか？⇒いいえ！彼らは皆、複数の妻を持つことで、神様からの祝福を逃してしまった上に…、たくさん問題や苦しみを、その身に招いてしまったように、聖書には記されてあると私は思っています…。

II・神に選ばれた者は、“聖なる民”であるから！（申命記 7:1-6）

今度は、申命記 7 章のみことばに目を向けたいと思います。ここ申命記 7 章では、神様から選ばれた、あのイスラエルの民たちが、“聖なる民”である！ということで、神様から特別な期待を寄せられていたことが分かります。もちろん、旧約の時代のイスラエルと、今の私たちクリスチャンとで、同じように考えるべき点とそうでない部分がありますが、まずは、旧約の時代、神様が選民であるイスラエルに期待しておられたことについて見ていきましょう。どうぞ、できましたら、申命記 7:1-6 をご覧ください。そこには、このように記されています。

1 あなたが、入って行って、所有しようとしている地に、あなたの神、【主】が、あなたを導き入れられるとき、主は、多くの異邦の民、すなわちヘテ人、ギルガシ人、エモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、およ

- びエブス人の、これらあなたよりも数多く、また強い七つの異邦の民を、あなたの前から追い払われる。
- あなたの神、【主】は、彼らをあなたに渡し、あなたがこれを打つとき、あなたは彼らを聖絶しなければならない。彼らと何の契約も結んではならない。容赦してはならない。
- また、彼らと互いに縁を結んではならない。あなたの娘を彼の息子に与えてはならない。彼の娘をあなたの息子にめとってはならない。
- 彼はあなたの息子を私から引き離すであろう。彼らがほかの神々に仕えるなら、【主】の怒りがあなたがたに向かって燃え上がり、主はあなたをたちどころに根絶やしにしてしまわれる。
- むしろ彼らに対して、このようにしなければならぬ。彼らの祭壇を打ちこわし、石の柱を打ち砕き、彼らのアシェラ像を切り倒し、彼らの彫像を火で焼かなければならぬ。
- あなたは、あなたの神、【主】の聖なる民だからである。あなたの神、【主】は、地の面のすべての国々の民のうちから、あなたを選んでご自分の宝の民とされた。

● ユダヤ人 たちに、主が命じられた純潔！

このみことばは、神様から選ばれたイスラエルの民たちが、いよいよ、約束の地であるカナンに入っていくとする…、その時、神様がアブラハムの子孫であるユダヤ人たちに対して、注意 & 警告された内容について記されています。ここを読んでくださったなら分かる通り、天の神様は、イスラエルが約束の地カナンに入っていくに当たって、そのカナンに住んでいる先住民を聖絶…、つまり、神の名のもとに滅ぼすべきであって、どんな契約も、まして、結婚などの関係を持つてはならない！ということをお教えしておられます。

…と言いますのも、その民たちは皆、真の神様を知らないがゆえに、彼らと関係を持つことは、偶像の神々を招き入れてしまう恐れがあり、ひいては、その結果と言うか、異教の民たちとの結婚によって、自分たちに神様からの怒りが下って、滅びをその身に招いてしまう、というような警告でありました。皆さんも、ご存じだと思います。実際、特に、イスラエルが北と南に分裂して以降、彼らは、偶像礼拝の罪に陥って、その報いとして、大変な苦しみや悲しみを経験することになっていきましたでしょ…。

このように、天の神様は、御自分が選ばれた『聖なる民』、聖なるイスラエルが、それとは違う…、異教の神々に仕えている者たちに染まっていくことを、決して望んではおられませんでした。しかし、現実には、そうなってしまったのです。

皆さんもご存じのように、聖書の中で、「聖い(とか)、聖なる…」と言われた時、それらは決して、道徳的な聖さだけを教えようとしているわけではありません。例えば、神様がアブラハムや、その子孫であるイスラエル民族を選ばれたのは、彼らが特別聖い人間、良い人間だったからではありません。皆さん、覚えてくださっています？…先週、私たちがバプテスマのヨハネについて学んだ時、聖書がそのヨハネのことを「聖なる…」という言葉を使って説明していましたが、その「聖」という言葉の説明で、それは、「神様だけが御持ちの聖さとか、神様の御用に使われるだけの特別なものを指す場合に使われる…」なんていうくだりがありましたでしょ？聖書の中で、「聖」という言葉を使う時、多分1番大きなイメージは「分離する…」というイメージなのです。ヨハネは、神様によって、特別に選り分けられた存在であったのです…。

このように、天の神様は、聖なる民とされたイスラエルに対して、「聖くあれ！異教の民たちと分離せよ！」ということを願い…、そう教えられたのです。しかし、イスラエルは、神に従うことができませんでした。

● その影響を受けた家族、特に 子どもたち

どうぞ、今度は、エズラ記 10 章を開けてみてください。…実は、ここでは、「異教の民たちと結婚してはならない！」という神様の警告に従わなかったイスラエルに対して、当時の指導者エズラが、大変厳しい命令と言うか、悔い改めをうながしているシーンを見ることができます。そこには、こう記されてありま

す。『1 エズラが神の宮の前でひれ伏し、涙ながらに祈って告白しているとき、イスラエルのうちから男や女や子どもの大集団が彼のところに集まって来て、民は激しく涙を流して泣いた。2 そのとき、エラムの子孫のひとりエヒエルの子シユカヌヤが、エズラに答えて言った。「私たちは、私たちの神に対して不信の罪を犯し、この地の民である外国の女をめとりました。しかし、このことについては、イスラエルに、今なお望みがあります。3 今、私たちは、私たちの神に契約を結び、主の勧告と、私たちの神の命令を恐れる人々の勧告に従って、これらの妻たちと、その子どもたちをみな、追い出しましょう。律法に従ってこれを行いましょ。4 立ち上がってください。このことはあなたの肩にかかっています。私たちはあなたに協力します。勇気を出して、実行してください。」5 そこで、エズラは立ち上がり、祭司や、レビ人や、全イスラエルのつかさたちに、この提案を実行するように誓わせたので、彼らは誓った。』(エズラ記 10:1-5)

⇒皆さん、聞いてくださいました？…この時、エズラはイスラエルを代表して、とんでもないことをイスラエルの民たちに提案しています。だって、自分たちが結婚した外国人と言うか、異教の神々を信じる妻や子どもたちを追い出したというわけでしょ？…でも、この当時、イスラエルの民たちは、それほどまでに…、自分たちの罪や過ちに苦しんで、打ちひしがれていたのです。

前回にも言いましたように、神は離婚を憎んでおられます！そうマラキ書2章でも教えられています。ですから、今の時代、私たちが、このエズラたちと同じことを、勿論すべきではありません。しかし、大切なことは、この当時、イスラエルの民たちが、神様からの警告を軽んじてしまったために、彼らは…、いえ、特に、その子どもたちが大変な苦労を経験してしまったということです。

このことと直接の関連はありませんが、申命記5章には、こんなくだりがあります。『8 あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形を造ってはならない。9 それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、【主】であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、10 わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。』(申命記 5:8-10)

⇒今日は時間の関係もあって、詳しい説明はできません。しかし、このみことばが教えてくれていることは、私たちが下す選択の…、その影響を、私たちの子どもたちは受けていくということでもあります。もちろん、そういったことは、このみことばだけが教えていることではありません。聖書の多くのみことばが、それと同じことを教えてくれているのです。…ですから、私たちが覚えなれないといけないのは、例えば、私が下す…、その選択の影響を、私の妻や子どもたちは、例え本意ではなかったとしても受けてしまうということです。

例えば、その昔、私たちの教会でも、こんなことがありました。…ある時、私たちが活動していた場所の近くで、ある会社が潰れて、その土地と建物が売りに出されました。当時、賃貸の物件ではない…、自分たちの教会の土地や建物を探していた私たちは、大急ぎで、その物件を見に行き、臨時の会員総会まで開いたりして、「その物件を買おう！そこに教会ごと引っ越そう！」と決めました。2009年の6-7月のことです。皆さん、覚えてくださっていますでしょ？

当時、私は、その物件のために祈っていましたが、先に、別の会社を買ってしまったということで、結構なショックを受けたことを覚えています。でも、「神様は、最善をなして下さる御方である！今度、本当に与えられる物件は、今回の物件以上のものである！」そう信じて、神様の最善を待ちました。皆さんも、そうだったと思います。…それから、3年近く後…、2012年に与えられたのが、この場所でした。

歴史に、「もしも…」はありません。ですから、私たちは、基本的に1つのことしか経験できません。しかし、もしも、私たちが、あそこの物件を買っていたら、どうなっていたでしょう？…正直、私は(あくまでも、私の場合ですが)、10年以上経った今、あそこの物件の前を通る度に、あの時のことを思い出して、「あ

の時、あの物件を買えなくて良かったー」と思っています。だって、もしも、あそこの物件を買っていたら、間違いなく、私たちの教会が、今の、この教会堂を手にするのは無かったわけですから…。

結婚も、それと似ているかも知れませんが、もしも、私たちが急いで結婚をしないで、神様のみこころや神様のタイミングを待つことができたなら、その後の結果は、もっと違って…、ますます、神様に喜ばれたものとなっていったかも知れませんが…。

正直、私も過去、何人も、「自分だって、できることなら、クリスチャンと結婚したい…」と告白していた青年たちと話をしたことがあります。私が話した青年たちは、その内9割以上…、いえ、多分全員がクリスチャンとの結婚を夢見て…、それを希望していました…。なのに、彼らは待つことができなかったのです。私はまた、急いで結婚をしていった人たちと、その後、話したこともあります。彼らの多くは、こんな悩みを持っていました。…例えば、夫婦間で、あまりにも価値観が違う、時間やお金の遣い方が違う、子どもができて、教育方針が違う…といったような感じです。多分、今後、親の介護や自分たちの老後の問題なども出てくるのではないのでしょうか？…でも、それはそうです！だって、同じ信仰を持ったクリスチャン同士でも、様々なことで、意見が食い違うことだって起こり得るのですから…。

正直な話、かなりの大恋愛をして結婚した私たち夫婦でも、時々、意見が違ったり、ケンカすることがあります(笑)。でも、感謝なことは、やはり、同じクリスチャン同士だということで、何か意見の相違があっても、一緒に祈りあったり、「じゃあ、聖書はどう教えているのか？」という共通の基準で相談し合えることです。…時々、信仰を持っておられない方たちから、「クリスチャンは、神様を一番に愛するから、何だか、本当なら自分に向けられるはずの愛情の一部が神様に奪われてしまった…」ように感じておられる場合がありますが、でも、実際はそうではありません！

愛と恵みに満ちた真の神様は、私たちクリスチャンに愛の模範を教え…、私たちのような偏った者に、最高の愛…、アガペーの愛を実践できる者へと変えていってくださるのです。正直、私は、そういった点でも神様に感謝しています。…と言うのは、もしも私がクリスチャンじゃなかったら、私は、今ほど妻や子どものことを愛せていなかったと確信しているからです。そのように、自分の配偶者がクリスチャンだったら、愛を奪われる、じゃないのです！相手がクリスチャンだから、自分は、もっと、愛されるはずなのです。そう、聖書のみことばは…、特に、Iヨハネ書が教えてくれていますでしょ？クリスチャンの皆さん…。

でも、一体どうして、結婚を急いでもった者たちは待つことができなかったのでしょうか？だって、もう後半年、あるいは1年待っていたら、相手の人が救われたかも知れないわけでしょ？…あるいは、初めから、「私は、クリスチャンとしか結婚しません！」と強く言っていたら、その覚悟を見て…、相手側も、聞く耳を持っていてくれたかも知れないし…、また別の、もっと素晴らしい人が与えられていたかも知れないじゃないですか…。もちろん、天の神様は、私たちが、どういった選択や行動をするか、すべて御存じであるわけですけれども…。

<励ましの言葉>

ここで、皆さんにお詫びしないといけません。…本当は、昨日まで、このメッセージは、1回で終わる予定で準備していたのですが、学びを進めていく内に、どうしても、1回では終わらなくなって…、この後半部分は、来週の礼拝で学んでいきたいと思います。残念ながら、今日私たちが見てきた、みことばは、ほとんどが旧約聖書のみことばでしたが、次回は、新約聖書が中心になっていきます。

しかし、どうぞ、皆さん、考えてみてください。…確かに、旧約時代のイスラエルと新約のクリスチャンとで、神様からの扱いが大きく異なることがあるというのも事実ですが、でも、神様は、同じ神様でしょ？…ヤコブ1章が、『…父(=神様)には移り変わりや、移り行く影はありません。』と教えてくれているように、天の父なる神様は、決して、年を取って…、考えが大きく変わられるような御方ではありません。…と言うことは、つまり、その神様のみこころも…、私たちに對する願いや期待もそう大きく変わるものではありません。

せん。そうでしょ？…どうぞ、神様のみこころが、どういったところにあるのか？また、神様のみこころは、一体、何のためのものなのか？来週の礼拝では、そういったことについて学ぶ予定をしておりますので、どうぞ、そういったつもりで、また、来週のメッセージを待っていただきたいと思います。

でも、今日のメッセージを終わる前に、1つだけ証しをさせてください。…実は、私が前にいた教会でも、やはり、クリスチャンの青年たちが、信仰を持っていない人たちと交際をして…、結婚のことで、相当思い悩むという人たちが数多くおりました。確かに、その中で、多くの人たちが、信仰を持っていない方たちと結婚していったことも事実ですし…、その中の多くの人たちは教会に行くのを止めてしまったようです。

でも、私が知っているのは、そういった中であっても、かなり悩みつつも、「やはり、クリスチャンと結婚したい！神様のことを一番に優先するんだ！」と考えて、それを貫き通した人たちが複数居たということです。ある人は4-5年、また、別のある人は10年近く、思い悩んで…、私なんかには分からないような葛藤をして…、とうとう、願いが叶って、信仰を持つことを拒み続けていた人が救われて、クリスチャンと結婚された方もおられます。

確かに、その人たちが経験した…、何年もの時間は返ってこないかも知れません。でも、果たして、彼らが経験した時間は、「全くのムダ」だったんでしょうか？私はそうは思いません。…この教会でも、新しい会堂が与えられるまでの数年間、いえ、この教会ができて…、この場所に引越してくるまでの14年間…、その間も、天の神様は、常に素晴らしいことをしてくださって、それらを経験してきた私たちにとっては、1年たりともムダな年はありませんでした。そうですね？

大切なのは、いつ結婚するか？ではありません。早くに結婚すれば良い！というのでも、勿論ありません。子どもが与えられる内に…、というも聖書的ではありません。私は、お子さんが居ないご夫婦でも、幸せで…、神様によって祝福された夫婦を何組も知っています。また、その逆で、早くに結婚したけど…、子どもも与えられただけ…、正直…、あまり幸せではない…、祝福された結婚生活を送っているとはあまり言えないご夫婦も知っています…。

私たちが幸せな人生を送る…、神様から祝福された人生を歩んでいくということ、結婚とはイコールではありません。…そうでしょ？結婚したから幸せとは限らないし…、その逆に、結婚していないから不幸せとは勿論限りません。でも、私は、こう信じています。要は、神様からの祝福があるかどうか？だって…。今日、私が皆さんにお勧めしたいのは、まずは、この神様を信じて…、そうして、その神様が示して下さる、みこころに皆さんが従っていただくことです。その先に結婚があろうとなかろうと関係ありません。子どもが与えられようと与えられまいと…、あるいは、健康であろうと病気がちであろうと、そういったことも、神様からの祝福や私たちの幸せとイコールではありません。

どうか、皆さんには、ますます、この真の神様のことを知ってくださって…、本当の祝福、本物の幸せというものを手に入れていただきたいと思います、心から願っています。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。